



## 単式簿記は複式簿記の萌芽なのか

—会計の本質との関連において—

渡 邊 泉

**概要** 複式簿記は、13世紀初頭のイタリアで発生したが、簿記の起源は、複式簿記の起源であって、単式簿記の起源ではない。では、単式簿記の起源は、いつになるのだろうか。複式簿記は、単式簿記から進化したという解釈が一般的のように思われる。もし、簿記を企業間の商取引を記録し、利益を計算し、それを報告するプロセスであると規定するならば、簿記の起源は、複式簿記以外の何物でもない。なぜなら、企業間の商取引の記録は、必然的に二面的な記録、すなわち複式記録がアプリアリなものとして存在しているからである。単式簿記は、18世紀後半のイギリスで複式簿記の簡便法として誕生した。決して単式簿記から誕生したものではない。

**Abstract** The interpretation that double entry bookkeeping evolved from single entry bookkeeping seems to be a general understanding. But, single entry bookkeeping was born in Britain in the second half of the eighteenth century as a simple and an easy method of double entry bookkeeping. Never double entry bookkeeping develop from single entry bookkeeping. Bookkeeping appeared first as double entry bookkeeping on the historical stage. We can find an early example of Hutton's bookkeeping textbook (2nd ed.) which was published in 1766 in Newcastle. Single entry bookkeeping is the most simple concise method, but it is imperfect. Because the ledger in single entry bookkeeping consists of only personal accounts.

**キーワード** 単式簿記, 複式簿記, 簡便法, <sup>デイ・ブックス</sup>仕訳日記帳, C. ハットン  
原稿受理日 2012年4月30日

## 1. はじめに

複式簿記の起源は、一部には古代ローマ起源説も存在するが、一般的には、13世紀初頭のイタリア北方諸都市で発生したと言われている。われわれが13世紀初頭のイタリアに簿記の起源を求めるのは、複式簿記の起源であって、単式簿記の起源ではない。では、単に簿記の起源という場合、その起源は、いつになるのであろうか。複式簿記の起源なのか、それとも単式簿記のそれなのか。いずれにせよ、このテーゼを解き明かすためには、何よりも先ず簿記とは何か、すなわち簿記の定義を明確にする必要があると思われる。

一般的には、簿記とは、帳簿記録を略したものとされているが、概して、その簿記には複式簿記と単式簿記の二つがあると言われている。重要なのは、誰が（主体）が何を（客体）何のために（目的）に記録するのかである。もし、簿記を、企業間の商取引を記録し、その記録にもとづいて1年間の期間利益を計算しその結果を記帳係や代理人が事業者にあるいは事業者が出資者や債権者に報告するプロセスであると規定するならば、それは、複式簿記に関わる問題になる。なぜなら、企業間の商取引の記録は、後に述べるように、必然的に二面的な記録、すなわち複式記録がアプリアリなものとして存在しているからである。しかしながら、簿記を単なる財産管理のための現金収支の増減記録とするならば、簿記は、一般に理解されているいわゆる単式簿記に関わる問題になるであろう。

本稿では、簿記の本質をどのように捉えるかを先行研究に依拠しながら、簿記の起源を複式簿記のそれと見なすのか、単式簿記のそれと見なすのかを通して、企業簿記としての複式簿記の起源を追跡していくと同時に、複式簿記が単式簿記から進化したという一般的な解釈に対して、その解釈に論理的矛盾がないか否かを吟味していくことにする。

## 2. 複式簿記の誕生

周知のように、複式簿記は、13世紀初めのイタリア北方諸都市において、債権債務の備忘録として発生した。発生当初の複式簿記の第一義的な役割は、損益計算ではなく債権債務の備忘録ないしはトラブルが生じたときの文書証拠、すなわち公正証書の代わりを果たすことにあった。人間の記憶には限界がある。そのため、後日のトラブルを回避する目的で記録されたのが、複式簿記である。万一、係争になった時、帳簿が裁判所に提出され、証拠書類として用いられた。複式簿記は、日々の取引をいつでも誰によっても検証できる

文書証拠として書き残すために記録されたものである。

複式簿記の13世紀イタリア起源説に対して、ピーター・カッツやデビッド・マリーは、複式簿記がすでに古代ローマにおいて生成していたと主張する<sup>(1)</sup>。しかし、歴史の連続性ないしは継続性の観点、さらにはそれを実証し得る具体的事実を史料として確認できない等の理由によって、史家の間では、複式簿記は、中世末葉ないしは近世初頭のイタリア北方諸都市で発生し、完成したというのが定説になっている。

ドゥ・ルーヴァ（Ramond de Roover: 1904-72）は、複式簿記の生成要因として、①信用〔取引〕（credit）、②組合〔企業〕（partnership）、③代理人〔業務〕（agency）を挙げて、13世紀始めのイタリアにおいて複式簿記を発生せしめた原点にこれら三つの要因を位置づけた<sup>(2)</sup>。

先ず初めの信用取引であるが、物々交換や現金取引であれば、取引は、その場で決済されたことになる。そのため、後の清算のために、取引を記録しておく必要はない。しかし、信用取引が発生すると、人間の記憶には限界があるため、後日の決済に際し、「すでに返済した、いやまだもらってない」といったトラブルが発生する恐れが生じてくる。このような事態を回避するために、第三者の立会いの下で借用証書等の公正証書を取り交わす必要が生じてくる。しかし、取引量が増大してくると、すべての取引に公正証書を取り交わすには、コストと時間がかかりすぎる。そのため、公正証書の代わりに信頼できる取引の詳細な記録を商人たちが自らの手で記録するに至った。複式簿記の誕生である。

それ故、複式簿記の発生当初の第一義的な役割は、多くの場合、商人間での取引上の決済にあたり、<sup>いさか</sup>諍いが生じたときの証拠書類にあった。この証拠性こそが複式簿記を誕生させた最大の要因なのである。残存する16世紀頃までの多くの帳簿や簿記書の冒頭に、十字架とともに「神の名において、アーメン」（Al Nome di Dio, Amen, In the Name of God, Amen）という文言を書き記したのは、帳簿に正確さや証拠性を高めるためであった。すなわち、それは、会計帳簿に公正証書と同等の信頼を与えるための証明の印であったのである。800年の時を経て今日に至るまで、多くの商人たちの古い帳簿が現存しているのは、まさに係争に際して裁判所に証拠書類として提出されたからであろう。

二番目の組合企業に関しては、13-15世紀のヴェネツィアの企業形態は、一般的にはソキエタス（合名会社的一种）と呼ばれるもので、当時のヴェネツィアの血縁を重視する貴

(1) Kats [1929], pp.203-210 & pp.275-290, Murry [1930], pp.125-127. もちろん、ここで彼らが主張する古代ローマ起源説は、複式簿記の起源であり、いわゆる単式簿記の起源を指しているわけではない。

(2) De Roover [1938], p.145, and De Roover [1956], pp.115-117.

族社会の組織構成を反映して、個人か家族を中心に同族で集まった家族組合 (family partnership) が支配的であった。それに対し、フィレンツェの企業形態は、ヴェネツィアとは異なり血縁による結社を禁止していたため、通常3-5年の期間に区切って、同族以外の第三者を含めた、一般的にはマグナ・ソキエタス (合資会社) と呼ばれる期間組合 (terminal partnership) が中心に結成された<sup>③</sup>。そこでは、当然のことながら、組合員相互間で、当初は必ずしも定期的ではなかったが、利益を分配することが求められた。しかしながら、「勘定間の閉ざされた体系的組織」がまだ形成されるに至っていない段階では、企業全体の総括損益は、帳簿による継続的な記録以外の方法、すなわち集合損益勘定ではなく実地棚卸によって作成されたビランチオで求められた利益にもとづいて分配された<sup>④</sup>。いわゆる先駆的期間損益計算である<sup>⑤</sup>。

13世紀初頭から14世紀前半にいたる複式簿記の発生当初から完成に至る約100年の間は、複式簿記によって、したがって継続的記録にもとづく集合損益勘定によって企業損益を計算することは、できなかった。そのため、種々の財産を実地棚卸にもとづく時価評価によって企業の正味財産を算出し、2時点間のそれを比較して企業の総括的な損益の計算を行っていた。当時のフィレンツェにおいて他人と組んで結成された期間組合で作成されたビランチオがそれである。このビランチオは、今日の財産目録と利益処分計算書が一緒になった、いわば利益処分結合財産目録とでもいえる一種の財務表であった。名称はビランチオであるが、決して今日の貸借対照表ではない。

しかし実地棚卸だけによって企業損益を求めるならば、そこで求められた損益の信憑性が問題になってくる。ビランチオによる実地棚卸によって求めた利益を多くの関係者が納得できる何らかの他の手段によって証明する必要性に迫られた。すなわち、正確な記録によって証明することが要求されるに至ったのである。継続的な記録を基盤にした複式簿記による企業損益の計算である。いわば、資産負債アプローチによって求めた利益を収益費用アプローチによる利益で証明したのである。記録にもとづく損益計算の出現、すなわち、集合損益勘定による総括的な期間損益の計算、これこそが複式簿記の完成である。時まさに14世紀の前半のことである。ドゥ・ルーヴァーの挙げる複式簿記の生成要因としての組合 [企業] (partnership) の出現が、会計のそしてその計算構造を支える複式簿記の最も基本的な機能である損益計算を生み出したといえよう。

最後の代理人業務については、14-15世紀を迎えると、組合企業もその規模を拡大させ

③ 斎藤 [2002] 301-336頁。

④ 渡邊 [2005] 47-48頁、渡邊 [2008] 97-98頁

⑤ 先駆的期間損益計算については、渡邊 [2008] 108-109頁を参照。

て、各地に支店を設けるようになる。14世紀の前半に活躍したフィレンツェのバルディー、アッチアイウォーリ、ベルッチ商会は、経営を管理することが、またダティーニ商会では、マルコで代表されるように、各支店ごとに組合契約を締結し、各店舗から送られてくるビランチオや書簡を管理することが要求された<sup>6)</sup>。各支店や店舗の責任者は、当然のことながら、彼らのアカウントビリティを果たすために、その初期においては必ずしも定期的であったとは限らないが、本店の責任者に当って経営状態と財務状態の報告をなす責務を負っていた。すなわち、報告の義務づけである。この代理人〔業務〕(agency)が今日の会計の最も重要な役割である報告という機能を生じさせたのである。

ドゥ・ルーヴァは、これら三つの生成要因のなかで、組合が最も重要であると述べている<sup>7)</sup>。換言すれば、複式簿記の最も重要な役割が企業損益の算定であることをドゥ・ルーヴァは、明確に認識していたのである。信用取引は、トラブルが生じたときの文書証拠ないしは公正証書としての記録を発生させ、組合企業は、組員相互間の利益分配の手段として作成されたビランチオを日々の取引記録によって証明するために損益計算機能を生み出し、代理人業務が受託者から委託者あるいはパートナーへの、後世になってからは、経営者から株主や債権者に代表される利害関係者への報告の義務を生じさせた。信用取引によって生じた記録は、仕訳帳を生み出し、期間組合の出現による損益計算の必要性が元帳への転記を余儀なくさせ、その成果報告のために初期においては集合損益勘定や決算残高勘定が、後になって損益計算書や貸借対照表が歴史の舞台に登場してくる。

これら三つの生成要因が出揃うのが13世紀のイタリアであり、ここに複式簿記が誕生したのである。

### 3. 企業簿記としての複式簿記

かつて木村和三郎は、昭和8年1月と2月に『会計』第32巻第1号と第2号において「複式簿記と企業簿記」と題する論考を公表した。そこでは、「この小論の目的は、……複式企業簿記の本質を闡明するために、これを複式簿記と企業簿記とに分解して両者の本質を明らかにし、前者は単なる計算型式なるに反し後者は實質的であり、記録の内容にその本質を有し、従って会計主體（企業）の目的より當然その性質が決定を受けるものなる事を述べ、次で前者の超歴史性、技術的概念なる事、後者の歴史性、経済的概念なる事を高

(6) 泉谷 [1997] 288頁。

(7) De Roover [1956], p.115.

調せんとするにある」<sup>(8)</sup>と述べ、記録手段としての簿記を複式簿記と企業簿記に分解して、複式簿記の本質を解明しようと試みている。

木村は、複式簿記の本質について述べられているいくつかの文献を紹介しながら、これらに共通するのは、記帳された内容に関する実質的な説明、すなわち記録された事象の内容に関する説明に終始し、「複式簿記の本質の説明に當って記録の実質的内容に準據することは根本的に誤謬である。……蓋し複式簿記なるものは單なる記録計算組織に過ぎないものであるから」とし、「前掲の複式簿記の説明は凡そ複式商業（企業）簿記の説明、複式簿記を採用する商業簿記の説明であって決して複式簿記の純粹な本質の説述ではない」<sup>(9)</sup>と述べている。

木村は、さらに「複式簿記の本質の闡明には絶対に形式的でなければならない。それには商業簿記の臭味を聊かも混入するを許さぬ。……複式簿記の本質は次の二點にある。一、勘定形式を用ふる事。二、複記する事、従って勘定間の關係として貸借の平均が維持される事。複式簿記を複式簿記ならしめる本質は此の二點以外には求められぬ」<sup>(10)</sup>とし、「複式簿記は財産目録の助けを借りて貸借対照表を作成し損益の構成内容を明らかならしめ……損益の二重表示をなすと云ふ命題は凡そ複式簿記に關する所ではなくて企業簿記の説明である。單式簿記との比較に於て複式簿記を説明するものではない」<sup>(11)</sup>とも述べている。

確かに近代科学の手法として、ものの本質を明らかにするに際し、先ず初めに、分析的に接近する手法が有効であることを否定するものではない。しかしながら、すべての事象は、それ自体が単独で存在するのではなく、それを取り巻く世界内存在として歴史的制約を受けている。したがって、現実には、商人の創意工夫として発生した複式簿記もまた、悠久なる歴史の営みの中で、企業簿記ないしは商業簿記として生成したのは、紛れもない事実である。自らがこの計算技法を進化させてきた事実を論理展開の枠組みの外において論究しても、そのような手法のみによっては、決してその本質を見極めることはできないであろう。複式簿記を單なる純粹計算技法として捉える形式的接近法と複式簿記を企業簿記ないしは商業簿記としての捉える実質的接近法に二分して行ふ分析的手法で、果たして複式簿記の本質にたどり着くことができるのであろうか。取引を複式で記録するということは、複式で記入する目的なり必然性が存在する。その理を無視して、物の本質を解することはできない。簿記は、数学とは異なるのである。

(8) 木村 [1933a], 50頁。

(9) 木村 [1933a], 53頁。

(10) 木村 [1933a], 55-6頁。

(11) 木村 [1933a], 57頁。

私は、木村の説く分析的手法のみによる接近法では、如何なる社会科学もその本質を明らかにすることはできないと考えている。いわんや日々の商取引の中で商人たちの叡智によって考案された複式簿記であるなら、なおさら当時の時代背景を切り取って、純粹にその計算法だけを抽出したとしてもその本質に接近することは、極めて困難であると言わざるを得ない。われわれ個人がすべて時代の子であるように、複式簿記もまた商人たちの悠久なる歴史の営みの中で誕生した時代の落し子である。歴史という枠組みを外して、純粹技法として抽出された科学は、数学の如き自然科学ならいざ知らず、もはや社会科学の領域に止まることができなくなる。

リトルトン (A. C. Littleton: 1886-1974) は、先に示したドゥ・ルーヴァの複式簿記の三つの生成要因に対して、1. 資料 (簿記で整理せらるべきもの)、a. 私有財産 (所有関係を変更する力)、b. 資本 (生産に用いられる富)、c. 商業 (財貨の交換)、d. 信用 (将来財貨の現在使用)、2. 表現手段 (資料を表現する手段)、a. 書法 (永久記録の手段)、b. 貨幣 (交換の手段、計算の共通尺度)、c. 算術 (計算の手段)、を挙げ、これらの諸要素が経済的社会的環境によって総合的な力を与えられたときに、これから産みだされてくるものが、3. 方法 (資料を体系的に表現する方法)、すなわち簿記であるとした<sup>02</sup>。

リトルトンによるこのような考え方が先の『會計』に掲載された木村和三郎の論考「複式簿記と企業簿記」と同年に発表されたという事実は、歴史の偶然とでもいうのであろうか、極めて興味深いところである。リトルトンによれば、「これらは簿記を生成する基本的要素であるが、それが単に歴史的に出そろったというだけでは簿記を産みだし得るものではない。これらの諸要素はいずれも古代においてある種の形で現れていたが、早期の文明は今日われわれの理解する意味での複式簿記を産みだし得なかったのである」<sup>03</sup>。

その理由として、1072年にトルコ軍によって攻略された聖地エルサレムを奪回するために1096年から1272年に至って結成された十字軍の遠征によって、多くの資本と利益が北部イタリア諸都市に蓄積されたことを挙げている。すなわち、「古代文明の富は船となって活動せず、むしろ宮殿となって停滞した。しかし、中世イタリアでは、1200年から1500年にわたり、資本は一路生産方面に駆りたてられた。金のある貿易業者はみずから船をもち、資本を賭してこれに商品を満載した。もっとおだやかな行き方をとるものは、匿名組合員の出資を得て、みずからは業務執行組合員として活動した。さらに安全な途をえらぶものは、船を担保に金を貸すとか政府に金を貸すとかした」<sup>04</sup>。その結果、単なる富が利益を産

<sup>02</sup> Littleton [1966], 2<sup>nd</sup> ed., p.13, 片野訳 [1978], 23-4頁。

<sup>03</sup> Littleton [1966], 2<sup>nd</sup> ed., p.13, 片野訳 [1978], 24頁。

<sup>04</sup> Littleton [1966], 2<sup>nd</sup> ed., p.19, 片野訳 [1978], 32頁。

み出す資本に転嫁し、商業の飛躍的な発展や信用取引、あるいはアラビアから導入された計算技法としての算術等と相まって、複式簿記が誕生したのである。

こうして誕生した複式簿記の最大の特質は、単に記帳の二重性や貸借の均衡性に止まるものではない。「完全な簿記が成立するためには、均衡性と二重性以外にさらに別の要素が加わらなければならない。この追加さるべき要素とは、いうまでもなく、資本主関係 Proprietorship すなわち、所属財貨に対する直接的所有権と発生した収益に対する直接的要求権一である。この要素を欠くときは、勘定記入（帳簿記入）は、たんに相互に対応する記入の内容を要約してこれを適切な形式にまとめるということにすぎなくなる」<sup>65</sup>のである。「このような利潤計算こそが完全な体系的な簿記の職分であったのである。人はそれを複式簿記と呼」<sup>66</sup>んでいる。

#### 4. 「単式簿記から複式簿記へ」の問題点

簿記の生成史を考えるにあたって、簿記をどう捉えるか、どう定義づけるかが極めて重要になってくる。もし従来までの伝統的手法による歴史分析の側面から接近するならば、簿記史ないしは会計史の出発点は、「複式簿記」の生成史であって、「簿記」の生成史ではない。しかしながら、「『簿記』なる用語は一般に『複式簿記』にかえて用いられており、かならずしも、それは複式と単式との二つ [の] 簿記概念を包括するものではない」<sup>67</sup>ため、われわれが簿記の歴史というときには、概して複式簿記の歴史を指している。

複式簿記が13世紀の初めにイタリア北方の諸都市で企業簿記として商取引を記録する技法として産声をあげたのは、すでに述べたとおりである。すなわち、複式簿記（一般には簿記）とは、企業の商取引を記録し、利益を計算し、その結果を利害関係者に報告するプロセスである。英語で Bookkeeping といわれるように、その原点は帳簿への記録行為にあるが、それは、単なる財産保全のための管理行為ではない。簿記の役割にこの財産管理機能があるというのと、簿記の本質が管理計算であるというのは、分けて考えなければならない。

商取引は、物々交換であれ、現金決済であれ、基本は、等価交換で行われる。その交換が真に等価で行われたのかそうでないのかは、ここでは問わないことにする。必ずしも等

<sup>65</sup> Littleton [1966], 2<sup>nd</sup> ed., p.26, 片野訳 [1978], 45頁。

<sup>66</sup> Littleton [1966], 2<sup>nd</sup> ed., p.27, 片野訳 [1978], 45頁。

<sup>67</sup> Littleton [1966], 2<sup>nd</sup> ed., p.23, 片野訳 [1978], 38頁。



価でなくても、現実には交換することを了解した上での取引であるなら、結果的には、等価交換されたことになる。したがって、等価交換である以上、一方（出 or 入）だけで成立するのではなく、必ず同一価額のもう一方（入 or 出）が存在する。すなわち、売手と買手が存在する。たとえそれが、利益との交換であったとしても、ここでの価値の出と価値の入りは、ある意味で原因と結果であり、フローとストックということもできる。この二面性にこそ、歴史的には、企業簿記が単式簿記ではなく複式簿記として最初に登場する論理的かつ現実的根拠がある。

すでに述べたが、今少し厳密に言えば、そこでの交換が果たして真の意味で等価交換取引であるか否かは、売手と買手の当事者間の力関係や独占市場であるか否か等の市場の様々な状況によって異なるところであるが、少なくとも取引が成立した時点では、形式的には、等価交換が行われたことになる。必然的に、売手と買手の同一金額による両面からの記録、すなわち複式によって記録されることになる。18世紀後半のイギリスで、この複式による記録を簡便にするために略式の記録方法が考案される。これが単式簿記である。したがって、取引を記録するための技法としての簿記は、先ず、複式簿記として成立したのである。決して、単式簿記から複式簿記へと進化して行ったわけではない。

しかしながら、簿記を企業簿記に限定せず、単に経済的行為の記録技法と見なすならば、単なる現金の収支記録もまた簿記となり、それを単式簿記と定義づけるならば、単式簿記は、歴史的に複式簿記に先行することになる。もし、このように解釈するならば、歴史の連続の中で、換言すれば歴史的進化のプロセスの中で、単式簿記から複式簿記への進化のプロセスをどのように解釈するのか、どのように位置づけるのかが問題になる。歴史という一連の舞台の中で、進化というフィルターを通して見る限り、企業簿記は、商業資本の勃興と共に、企業簿記としての複式簿記として誕生し、後世になり、その簡便法としての略式企業簿記として単式簿記が考案された。すなわち、すでに完成した企業簿記としての複式簿記から一般的にわかり易い代替的簡便法としての単式簿記が生み出されてきたのである。

もちろん、18世紀後半にイギリスで登場する単式簿記というのは、単なる現金の収支記録ではなく、本稿の「おわりに」で述べるように仕訳日記帳に記帳された取引のうち、債権と債務のみを元帳に転記し、その差額をもって利益とみなす簡便的な手法を示している。したがって、部分的ではあるが、決して単式ではなく複式で記録される簿記法なのである。すなわち、複式簿記に代わる簡便的な代替法としての記録システムである。したがって、この複式簿記の簡便法として登場する略式単式簿記と、例えばすぐ後で見ると、中世

イギリスの荘園会計における財産管理のための記録システムとしてのいわゆる単式簿記とは、分けて考えなければならない。

時間軸を中心に見る限り、簿記は、複式簿記として成立し、後年、その略式法ないしは簡便法として、単式簿記が出現することになる。それ故にこそ、今日においても、複式簿記と単式簿記が併存しているのである。先にも述べたように、単式簿記から複式簿記が揚棄されたのであれば、複式簿記の成立と共に、単式簿記は、消滅しているはずである。福沢諭吉が『帳合之法』全4巻(1873, 1874)で複式簿記を本式、単式簿記を略式と呼んだのは、まさしく卓見であったといえよう。略式は、本式が先にあってこそ初めて略式となる。歴史の舞台に、略式が先に登場することはない。

しかし、簿記を企業簿記に限定せず、経済的行為の記録技法と見なすならば、単なる現金の収支記録もまた簿記(単式簿記)となり、歴史的に複式簿記に先行することになる。だとすれば、両者の歴史的継承性をどのように説明するのが問題になる。もし、複式簿記が単式簿記から進化したのであれば、あるいは単式簿記が揚棄されて複式簿記へとその姿を変えていったとするのであれば、繰り返しになるが、複式簿記の成立後には、単式簿記は、消滅しているはずであろう。

イギリスにおける最古の勘定記録は、1130年頃に今日の財務省にあたるエクステッカーが国王に支払うべき地代や租税等を記載した一種の帳簿であると言われている<sup>88</sup>。またしばしば、イギリスにおける荘園会計で用いられた「チャージ・ディスチャージ報告書」が時として複式簿記の萌芽的形態であると見なされることもあるが、これはあくまでも荘園領主に対して代理人が自らの責任の受託とその履行を説明した報告書に過ぎない。

チャットフィールドも述べているように、このチャージ・ディスチャージ報告書は、「15世紀のスコットランドにおいて政府の会計官が不動産会計で使用し展開され、それをイギリスの荘園 steward が採用したのであり、管財人が広く用いるようになったのはそれから300年も後のことである」<sup>89</sup>。責任の受託とその履行といった二つの側面から記載された報告書という理由から、これに複式簿記の原初形態を求めるのは、誤りと言わざるを得ない。「我々は中世の簿記に事実以上のものを求めすぎているのかもしれない。会計の継続性、比較可能性の如き現代の条理は、[当時のチャージ、ディスチャージ報告書のなかには一渡邊注]ほとんど存在していなかった」<sup>90</sup>といえよう。

<sup>88</sup> Chatfield [1973], p.21. 津田, 加藤 [1978], 25頁。

<sup>89</sup> Chatfield [1973], p.25. 津田, 加藤 [1978], 31頁。

<sup>90</sup> Chatfield [1973], p.28. 津田, 加藤 [1978], 34頁。

## 5. 仕訳における「こと」の世界と「もの」の世界の二面性

複式簿記が企業における経済事象，すなわち市場における等価交換取引を記録する技法であるとすれば，先にも述べたように，その記録は，必然的に交換を提供する自己とそれを受け入れる他者の二面性を内在させていることになる。この二面性は同時に，その経済行為の原因と結果，あるいはフローとストックという形で現れる。換言すれば，経済行為すなわち取引それ自体は，経済行為を引き起こす原因あるいは意識の世界，すなわち「こと」の世界とその結果として現象する実在の世界，すなわち「もの」の世界の二つの側面を表象させていることになる<sup>20</sup>。

会計の世界では，前者の原因計算は，損益計算書に表示され，後者の結果計算は，貸借対照表において具現化する。複式簿記は，費用と収益の対応計算によって原因の側面から抽象的に利益を計算すると同時に，それを結果の側面から具体的に計算していく。二面的，したがって複式による損益計算である。それに対して，いわゆる単式簿記は，収入と支出の比較計算によって結果の側面からのみ活動成果を具体的に計算する手法であるといわれることがある。一般的にいえば，複式簿記には二面性があり，一方で抽象的な損益計算を行う損益計算書が「こと」の世界を表わし，他方で貸借対照表が結果として具体的に表現された「もの」の世界を表わしていると理解するのが自然であろう。概して，具体的な「もの」の世界の方が抽象的な「こと」の世界よりも理解しやすいのはいうまでもない。例えば，複式簿記の発生当初から19世紀に至るまでの600年近くの間，商品勘定は，具体的な商品名勘定，いわゆる口別商品勘定で処理されていた。今日のように，仕入勘定や売上勘定といった抽象的な統括勘定が登場するのは19世紀初めから19世紀後半にかけてのことである。仕入とか売上という抽象的な概念より，胡椒とか毛織物といった具体的な商品名で処理する方がはるかに分かり易いからである。

今日の資産負債アプローチは，経済行為の結果のみを重視し，実在していると錯覚した世界，すなわち貸借対照表を重視し，そこで示された事物が実在していると認識している意識の世界，いわばその実在を生じさせた原因の世界，すなわち極論すれば損益計算書を無視するという利益観ないしは会計観である。

いうまでもなく，多くの人が実在していると感じている貸借対照表の世界は，その実在

---

<sup>20</sup> 木村 [1982] 第1部「こととしての時間」を参照。

を認識している意識の世界，すなわち損益計算書を否定すれば，実在そのものが存在しなくなることを承知しなければならない。なぜなら，今現実に見えている世界は，われわれ個人が無数に見える世界であり，実在すると思われている世界とは位置関係が異なり<sup>22</sup>，両者を切り離しては，それぞれが単独に実在することができない関係におかれているからである。このように考えると，今日の資産負債アプローチに見られような損益計算書を否定した会計観のもとでは，貸借対照表だけの世界もまた，実在しえないことになる。

取引を記録する複式簿記は，本質的に二面性を有している。しかし，それを受け取る側，すなわち記録する側の意識を無視するとすれば，取引自体が何の意味も持たなくなる。すなわち，一方を否定すれば他方もまた実在しなくなるのである。意識がなくなれば実在の世界もなくなる。換言すれば，個々人の意識の世界の中でしか今われわれの目の前にある事物が実在しないのであれば，意識すなわち原因の側面を否定して実在していると思込んでいる結果の側面のみを透視しても事物の本質は見えてこないのである。平たく言えば，損益計算書なしで貸借対照表だけでは，取引の実像を把握することができない道理になる。今日の資産負債アプローチを過度に偏重する会計観では，現実の会計行為を捉えることができなくなる。

交換取引とは，言うまでもなく，商人たちの日々の行為の営みであり，商行為である。したがって，取引は，商人たちの意識のなかで生じる事象であり，もしこの意識主体が存在しなければ，経済行為それ自体も実在しないことになる。経済行為を記録する媒体としての複式簿記自体も同時に存在しなくなるのである。このように考えていくと，取引の記録手段を複式簿記と企業簿記に分けて考察する考え方は，取引の記録手段として発生した複式簿記の実体の解明手段としては，現実的とは言えないのではなからうか。それは同時に，簿記が経済事象を結果の側面からのみ一面的に捉える単式簿記として成立することはできず，単に結果としての実在の世界すなわち財産目録ないしは貸借対照表だけではなく，それを産み出した原因としての意識の世界すなわち損益計算書があってこそ，経済行為の結果が実在することを意味しているのである。

## 6. お わ り に

800年もの永きにわたり，会計の計算構造を支えてきた複式簿記は，企業損益の計算手

<sup>22</sup> 野矢 [1996]，19頁。

段として生成し、後にその簡便法としての単式簿記が誕生したことになる。両者は、その記帳手段を異にし、役割分担の相違の中で、それぞれの存在意義を果たして、共存してきた。もし複式簿記が単式簿記から進化したのであれば、すでに単式簿記は、消滅しているはずである。今日に至ってもなお、両者が併存しているのは、それぞれの役割が異なるからである。18世紀後半にイギリスで登場する複式簿記の略式として誕生した単式簿記は、損益計算の簡便法であり、現金収支簿記で代表される単なる財産管理のための単式簿記とは、座標を異にしたものとして考える必要がある。すなわち、複式簿記における損益計算の特徴は、フローとストックの両面から行われるが、単式簿記では、その単面のストック（債権・債務）にもとづいてのみ損益計算が行われるところにある。あえて言えば、ここに、単式簿記と呼ばれる根拠がある。

18世紀後半から末葉にかけてのイギリスにおいて、伝統的な単一3帳簿制のイタリア式貸借簿記法、すなわち複式簿記に対して、二つの新しい動向が生じて来る。一方では、街の商店などの零細企業にとっては、複式簿記が複雑で難解なためより簡単に分かりやすい簿記法に対する要求が登場し<sup>93</sup>、他方では、アメリカとの海外貿易に従事する商人たちにとっては、当時のアカデミーで教えている複式簿記は、単に簿記の基本原則を説くだけで、実際の実務への適用が困難なため、より実用的な簿記法に対する要求が登場してくる<sup>94</sup>。すなわち、前者への要求がハットン（Charles Hutton）やモリソン（James Morrison）やジョーンズ（Edward Thomas Jones）に代表される単式簿記（single entry bookkeeping）を出現させ、後者がブース（Benjamin Booth）やウィックス（J. Wicks）やシャイヤーズ（John Shires）に代表される実用簿記（practical bookkeeping）ないしは改良簿記（improved method by debtor and creditor）と題する簿記書を登場させたのである。

ハットンは、その著『教師の手引き：実用算術の完全な体系』（1764）の第3版『教師の手引き：実用算術と単式・複式の両者を含む簿記に関する完全な体系』（1771）、および第7版が1785年にロンドンで出版された『実用算術と単式・複式の両者を含む簿記に関する完全な論述』（*A Complete Treatise on Practical Arithmetic; and Book-keeping, both by Single and Double*）において、あるいは1808年のモリソン（James Morrison）の『簿記の原理と現代的改良を含んだ商人ための完全な勘定体系』（*A Complete System of Merchants' Accounts, containing the Principles and Modern Improvements of Book-keeping, Edinburgh*）

<sup>93</sup> 渡邊 [2012] を参照。

<sup>94</sup> 渡邊 [1993] を参照。

等では、単式簿記について次のような説明がなされている<sup>95</sup>。すなわち、単式簿記は、街の商店などの小売商や小規模の店で用いられる簡単な簿記で、複式簿記の発生以来用いられてきた日記帳<sup>フエイストブック</sup>を廃し、代わりに日記帳と仕訳帳を合体させた仕訳日記帳<sup>デイト・ブック</sup>を用いている。元帳には、人名勘定（債権と債務）のみしか設けられず、この債権と債務の差額をもって企業の利益と見なしている<sup>96</sup>。

利益計算に当っては、たとえ記帳が借方と貸方に複記されているとはいえ、単に債権と債務のみにもとづく、1部ではあるが、ストックの側面のみからの損益計算であるという意味で単式簿記ということができのかもしれない。これら18世紀後半にイギリスで登場する複式簿記の簡便法としての単式簿記は、「シングル・エントリー」と呼ばれているが、むしろ単純簿記「シンプル・エントリー」と呼ぶのが適切なのかもしれない。いずれせよ、複式簿記は、単式簿記から進化したのではなく、複式簿記の創意工夫によって生じた簡易簿記が単式簿記であり、複式簿記による損益計算の簡便法であるがゆえに、不完全簿記と称されているのである。一般に理解されているように単式簿記から複式簿記へと進化したのではなく、また一般にわが国で理解されているような単なる現金収支の記録システムが単式簿記というわけでもないのである。

会計の計算構造を支えてきた複式簿記は、企業損益の計算手段として、それに対して巷間伝わる単式簿記は、財産の管理手段として生成した。両者は、その記帳目的を異にし、それぞれの役割分担の相違の中で、それぞれの存在意義を果たし、共存してきた。もし複式簿記がいわゆる現金収支記録としての単式簿記から進化したのであれば、すでに単式簿記は、消滅しているはずである。今日、両者が併存しているのは、それぞれの役割が異なるからである。複式簿記の簡便法として18世紀後半のイギリスで誕生した単式簿記は、損益計算のための略式記録法であり、それまでも存在していた財産管理のためのいわゆる単式簿記とは、座標を異にしたものと考えなければならない。

今日の行き過ぎた資産負債アプローチにもとづく貸借対照表中心の会計思考は、極論すれば、損益計算書を不要とする会計観である。いわば、ストックの側面からのみの損益計算である。その意味においては単式簿記であり、損益計算という側面からは、不完全な簿記にもとづく不完全な会計観であるといえるのではなからうか。すなわち、資産負債アプローチによる会計観、換言すれば貸借対照表に過度に重点を移した今日の会計観では、取

<sup>95</sup> Hutton [1785], pp.145-146. ハットンの2冊の著書が内容的に同じであるのか否かについては、前者が手元がないため、確認できていない。なお、ハットンの簿記書（初版1764年）に関しては、西川 [1982] および山下 [2012] がある。

<sup>96</sup> 多くの商人たちは、主要簿としての仕訳日記帳と元帳の他に、現金出納帳、家計費帳、送り状帳等の補助簿を付けている（Hutton [1785], p.146.）。

引の実像を捉えることができないし、決して会計の本質を明らかにすることもまたできない。会計ならびにその計算構造を支える複式簿記の原点は、いつでも誰によっても検証可能であり、継続的な記録を前提にした、事実性と検証可能性に支えられた信頼性にこそ求められなければならない。すなわち、費用収益アプローチにもとづく利益計算こそが、会計にとってもっと根源的な役割なのである。

#### 参 考 文 献

- 泉谷勝美 [1997] 『スンマへの径』 森山書店。  
木村 敏 [1982] 『時間と自己』 中央新書。  
木村和三郎 [1933a] 「複式簿記と企業簿記」『会計』第32巻第1号。  
— [1933b] 「複式簿記と企業簿記（其二完）」『会計』第32巻第2号。  
斎藤寛海 [2002] 『中世後期イタリアの商業と都市』 知泉書館。  
西川孝治郎 [1892] 『文献解題日本簿記学生成史』 雄松堂書店。  
野矢茂樹 [1996] 『哲学の謎』 講談社現代新書。  
山下壽文 [2012] 「Charles Hutton の『簿記書』初版をめぐって」『佐賀大学経済論集』第45巻第3号。  
渡邊 泉 [1993] 『決算会計史論』 森山書店。  
— [2005] 『損益計算の進化』 森山書店。  
— [2008] 『歴史から学ぶ会計』 同文館出版。  
— [2012] 「単式簿記と複式簿記の関係—複式簿記は単式簿記から進化したのか」『会計』第182巻第5号。  
Chatfield, Michael [1974], *A History of Accounting Thought*, Illinois, 津田正晃, 加藤順介共訳 [1978] 『チャットフィールド会計思想史』 文眞堂。  
De Roover, Raymond [1938] “Characteristics of Bookkeeping before Pacioli”, *The Accounting Reviews*, Vol.XIII No.2.  
— [1956], “The Development of Accounting prior to Luca Pacioli”, in Littleton, A. C. and B. S. Yamey eds., *Studies in the History of Accounting*, London.  
Hutton, Charles [1771] *A complete Treatise on Practical Arithmetic; and Book-keeping by Single and Double*. 7th ed., London.  
Kats, Pieter [1929], “Early History of Bookkeeping by Double Entry”, *The Journal of Accountancy*, Vol.XLVII, March & April.  
Kenneth, S. Most [1979], “Sombart on Accounting History”, Coffman Edward N. ed., *The Academy of Accounting Historians*, Working Paper Series, Vol.2, Working Papers no.35.  
Littleton, Ananias C. [1933], *Accounting Evolution to 1900*, New York (1<sup>st</sup> ed. 1933). 片野一郎訳, 清水宗一助訳 [1978] 『リトルトン会計発達史 [増補版]』 同文館出版。  
Morrison, James [1808], *A Complete System of Merchant's Accounts, containing the Principles of and Modern Improvements, Book-keeping*, Edinburgh.  
Murry, David [1930], *Chapter in the History of Bookkeeping, Accountancy and Commercial Arithmetic*, Glasgow.  
Yamey, B. S. [1949], “Scientific Bookkeeping and Rise of Capitalism” in Yamey, B. S. [1978], *Essays on the History of Accounting*, New York.  
Paton, William A. [1962], *Accounting Theory: with special reference to the corporate enterprise*, Chicago.